

## ～お葬儀屋さんのひとりごと～

### 葬にまつわる体験談集

#### ■ 家に帰りたい [神奈川県 女性 栄養管理士 36歳]

母は、発病以来12年間、3度の手術と、放射線療法、化学療法などの為入退院を繰り返す日々を過ぎてきた。この長く苦しい闘病生活に、やっと別れを告げたのは、“死”への出発であった。8月。「お盆までもつかどうか危ぶまれる。」という医師の言葉を裏打ちするかの様に、母は、流動物すら飲み込むことが困難になった。衰弱は目に見えて現われ、医師は、IVH（中心静脈栄養）をするかどうか、同意を求めてきた。しかしこの時、私の脳裏を駆け巡っていたのは『母を家に帰したい。母を家で看取りたい』という思いだった。IVHを始めれば、病院を出ることは出来ない。私は、決断を迫られていた。母を家に連れ帰るということは、IVHはもとより、点滴もはずされ、母の命をつなぎとめていた医療行為の全てを取り去ってしまうことになる。さらに、母自身に与える精神的不安も気にかかった。しかし、迷っている時間はなかった。医師、ナースと相談の結果、私の、そして母の夢を、すぐ実行に移すことに決まった。家に着き、ストレッチャーが車から降ろされると、母はほほえみを浮かべ、何度も頷くようにして、深緑の草木を見つめ、その上で木もれ陽が、うかれるように揺れていた。畳の上に敷かれたふとんに体を横たえられると、母は「うれしい」と明るい笑顔を見せ、病室では、一人で体を動かすことも出来なかったのが、寝返りをうち、手や足を畳に触れて、懐かしそうに家の中の物音に耳を傾けていた。またいつもの生活が始まる様な錯覚の中にいた私に、「帰りたくないなあ（病院に）。このまま家で…」と言いかけて、母は口をつぐんだ。その声にならない言葉の意味に、私は母の手を握りしめ、無言で応えた。もしもIVHをしていたら、命は何日延びたのか。そして、母の、あのほほえむ様な死顔を、同じように見れたらどうか。――否。

#### ■ 一冊のアルバム [福島県 主婦 43歳]

一冊のアルバムが、ひっそりと本箱の隅に置いてある。32歳の若さで癌のため他界した女性の葬式の一部始終の写真集である。位牌を持ち妻に先だたれ、つらい表情の夫、両脇には、奮えたような表情で父親にしがみついた幼子2人の写真。その撮影日から3年後、私は嫁いだ。このアルバムを何気なく手にしたのは嫁いで1カ月過ぎた頃だった。死別とは承知の上ではあったがショックを受けた。何の為に、このアルバムを残してあるんだろうと不思議でもあった。友に「こんなアルバム処分しなさい」と言われたが、私は出来なかった。しかし、このアルバムを見た事で子供達への接し方が決まったような気がした。私としては死んだ母親を離れた生活をして思っていたが、このアルバムが残っている以上、私は故人と一緒に子育てしようと思った。命日、盆彼岸は勿論、子供の誕生日、入卒業、賞状をもらったと何かにつけ子供と一緒に仏壇に手を合わせ報告した。主人と子育てで口論、夜中一人で仏壇に「どうしたらいいの」と語りかけた事もあった。息子が中3の時、万引きをした。ふてくされる息子を仏壇の前まで引きずってき「私以上に死んだお母さんも悲しがっているよ」と涙ながらの説教に、普段あまり感情を出さない息子が「ごめんなさい」と声をあげて泣き、長時間2人で泣き合った。その息子も今、サッカー一筋の高2である。今年、看護学校入学の娘も、私の姿を通して身についたのか、朝の仏壇にお茶をあげている。あのアルバムに出会わなければ、私の子育ても違っていただかぬ。人は「何で死んだ人をひきずって生きるの」と言う。しかし、私は引きずってではなく、共に生き、共に子育てをしてきたように思う。だから2人の子供も非行に走る事もなく、健康で素直に育ててくれたのだと思う。

#### ■ 一杯のあついお茶 [男性 52歳]

会社の同僚の父親が亡くなったというので、その通夜に出かけた。寒さの厳しい冬の夕方、駅からかなり離れた所にある公営の斎場に着いた時には、体がすっかり冷え込んでしまった。亡くなったのが、退職してかなり長い間たった80歳すぎの方だったせいか、弔問に来る人が案外少なく、ひっそりとした通夜だった。焼香を終えて、知人と一緒に帰るころには、雨もぱらぱら降ってきて、「この分だと、今夜は雪になりそうだね」と話ながら駅の方まで歩いた。歩いているうちに、さらに体が冷えてきたので、駅の近くにそば屋を見つけたときは、ほっとした。温かいそばをすすると、やっと体があたたまり、生き返ったような気がした。知人と私は、どちらからともなく、「あの斎場で、あついお茶の一杯でもご馳走になりたかったね」と話し始めた。急に父親が亡くなったので、いろいろな用事に追われ、細かいところまで気がつかなかったのだろう。しかし、もしも遺族が気がつかないとしても、葬儀一式をまかされた葬儀社の方で、なぜもう少し気をきかすことができなかったのだろうか、と思った。弔問する人はそんなに多い訳ではなかった。あつい湯をポットに入れ、お茶と湯のみだけ用意すれば足りることである。そのぐらいの手間と費用は、しれたものである。たったそれだけの小さな心遣いでも、この寒い日にわざわざ来てくれた人たちに、どれだけ温かいお礼の気持ちを伝えられることか。「おれたちの時には、どんな質素な葬儀であっても、あついお茶の一杯ぐらいは出そうな」と、そばのおつゆを飲みながら、知人と話し合った。